
Web of Knowledgeの日本語インターフェース

矢田 俊文

トムソン・ロイター カスタマートレーニング

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋1-1-1 パレスサイドビル 5F

E-Mail : toshifumi.yata@thomsonreuters.com

1. Web of Knowledgeの日本語インターフェース

トムソン・ロイターは、2010年2月に、Web of Knowledgeの日本語インターフェースをリリースした。Web of Knowledgeは、Web of Science, EndNote Webを含む学術情報ソリューションのインターフェースで長らく英語のみで提供されていたが、2008年の中国語インターフェース・リリースに続き、日本語版のリリースに至った。本稿では、日本語インターフェースの注目事項、利用者の反応、利用統計の伸びに加え、2011年にリリース予定のWeb of Knowledgeバージョン5の新機能、同じく2011年にリリース予定の生物学系の引用データベースBIOSIS Citation Index, 既にリリースされているが、研究者を特定するのに役立つResearcher IDのプロジェクトの現在についてご紹介する。

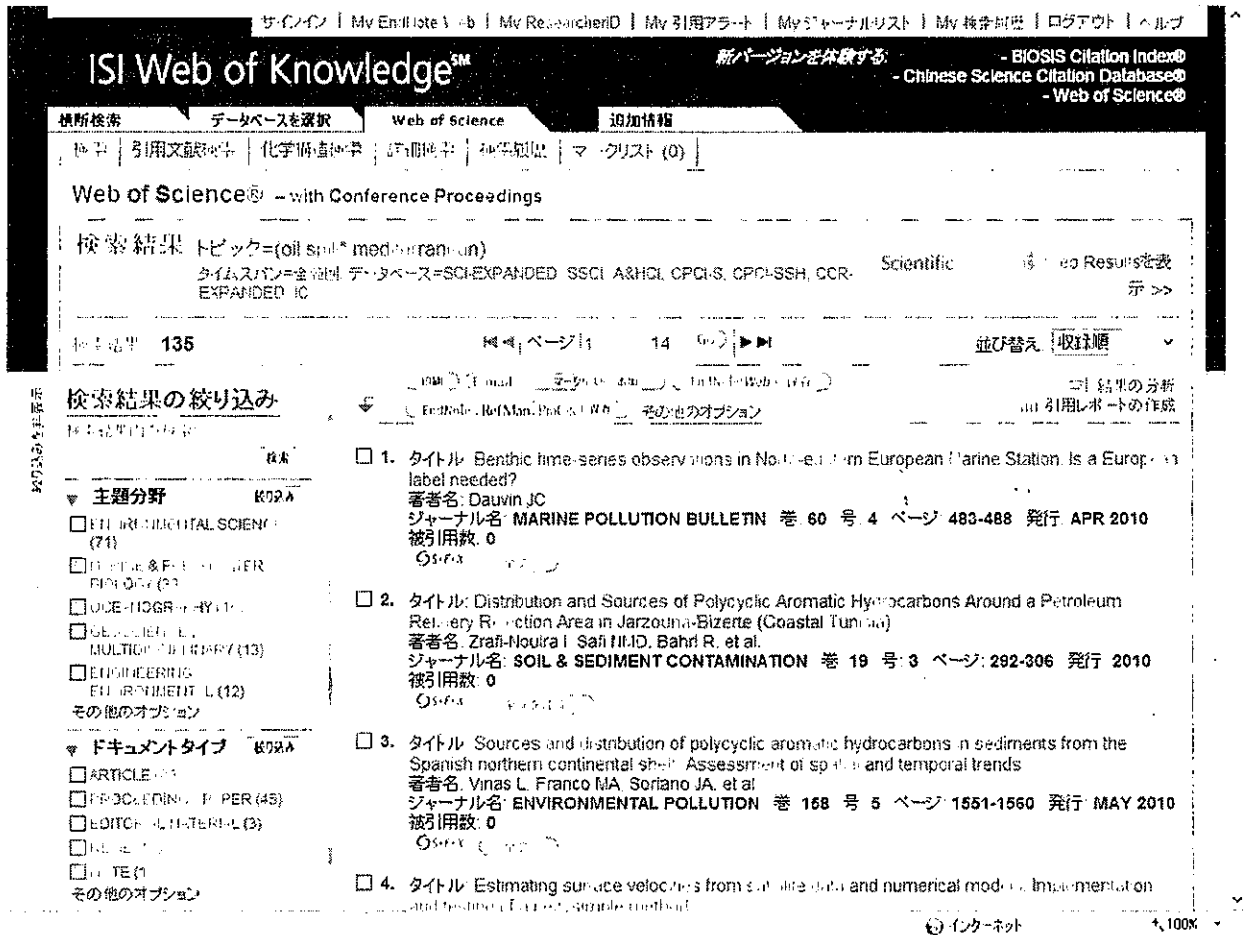
1.1 日本語インターフェース開発の背景

世界中の影響力の高い一流学術雑誌を11,000タイトル収録するWeb of Science, 世界41各国の特許情報を網羅するDerwent Innovations Index, 世界で一番利用されている文献管理支援ツールEndNote Webについて、日本の大学・研究機関・企業での導入が進み利用が増えるにつれて、インターフェースの日本語化が強く要望されて

いた。アジア言語でのインターフェース作成については、トムソン・ロイター社が真にグローバル企業となるべく最重要事項と考え、2008年には特許データベースThomson Innovationsの日本語インターフェース、Web of Knowledge中国語のインターフェースを皮切りに、インターフェースだけでなく中国語の文献情報も搭載しChinese Science Citation Indexもリリースしている。併せて、地域ジャーナルの追加も進みWeb of Scienceで検索できるアジアのジャーナル数も増やした。2010年7月には、『グローバル・リサーチ・レポート：日本』を発表し、既にレポートが出ているブラジル、インド、中国、ロシア、オーストラリア・ニュージーランド、アフリカに続き、アジアや日本の科学研究、共同研究の推移、ならびに世界の科学研究に占める地位などをまとめている。

Web of Knowledgeは、引用データを持つWeb of Scienceを中心に文献管理ソフトのEndNoteや、インパクトファクターへのリンク、BIOSIS, MEDLINE, Inspecなどの索引データベースとWeb of Scienceとの連携、電子投稿システムManuscripts Central Optimaとの連携などにより、文献を検索する為の「文献情報データベース」という位置づけから、検索・評価・論文執筆などを総合的

図 1



にサポートする「総合ワークフローソリューション」に生まれ変わり、さらにローカライズすることにより、より身近なツールとなるステップを踏み出したと言える。

1.2 日本語インターフェースの効果

英語・中国語・日本語のインターフェースが出揃うことで、それぞれの国での利便性が増えるだけでなく、日本国内にいる中国系の利用者にも、諸外国に留学している日本の利用者にも使いやすい環境を提供することができるようになった。それぞれのインターフェースは、ブラウザの言語設定を読み込んで自動的に対応するので、利用者の言語環境に最適のインターフェースが選択される。普段英語の世界で文献を読み書きしている一流の研究者をしても日本語の

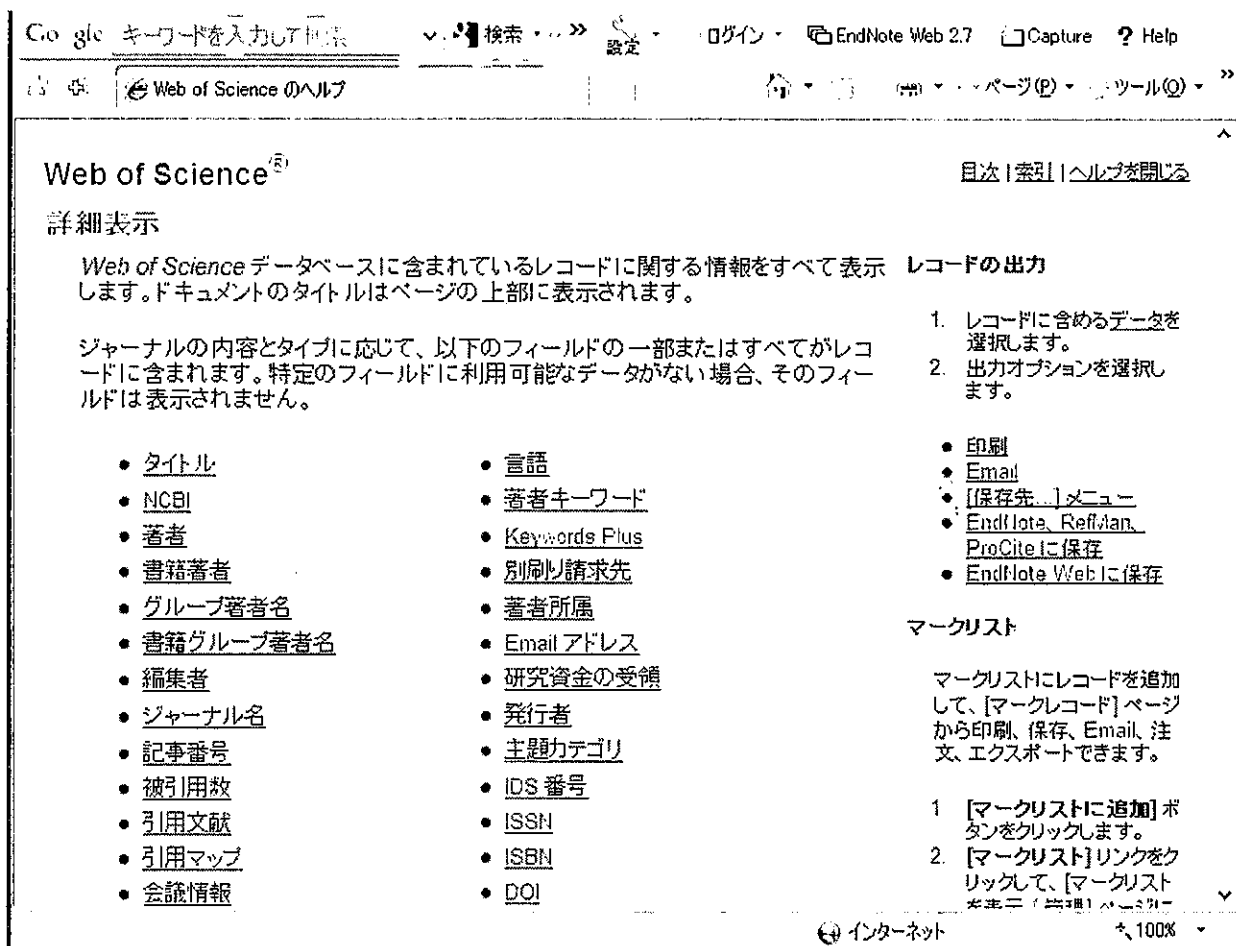
インターフェースは使いやすいと評判である。日本人は日本語のインターフェースで、中国人は中国語のインターフェースで、英語圏の人は英語のインターフェースで、しかも同じ情報を見ることができるので、より世界が身近になったに違いない。

また、日本語化により、研究者のみならず、学部生など普段学術データベースに触れていない利用者にも身近な存在となり利用者層が広がった (図1)。

1.3 日本語インターフェースの注目事項

日本語インターフェースになり、突如、日本語になって驚いたという意見もあったが、多くの図書館員の意見は「日本語インターフェースになり、わかりやすくなった。」「EndNote Webが

図 2



日本語化により、CiNiiや医学中央雑誌など日本語のレコードを整理したい人にも勧められる。」のというものだった。また、インターフェースが日本語化になって、それまで使われなかった機能が目に付くようになったという意見もある。特にヘルプファイルの完全日本語化は、今までになく詳細な説明を日本語で読むことができ、使っていなかった機能や、よく分からなかった機能も使うようになってきたと聞く。例えば、2009年秋より利用可能な、「助成金情報の検索や絞り込み」ができるのを始めて知った」とか、「関連レコードの機能」、「米国国立生物工学情報センター (NCBI) のリンク機能」、「検索の規則」、「検索演算子」、「並び替え機能」、「Thomson Scientific WebPlus-Web 検索結果の表示」、「[著

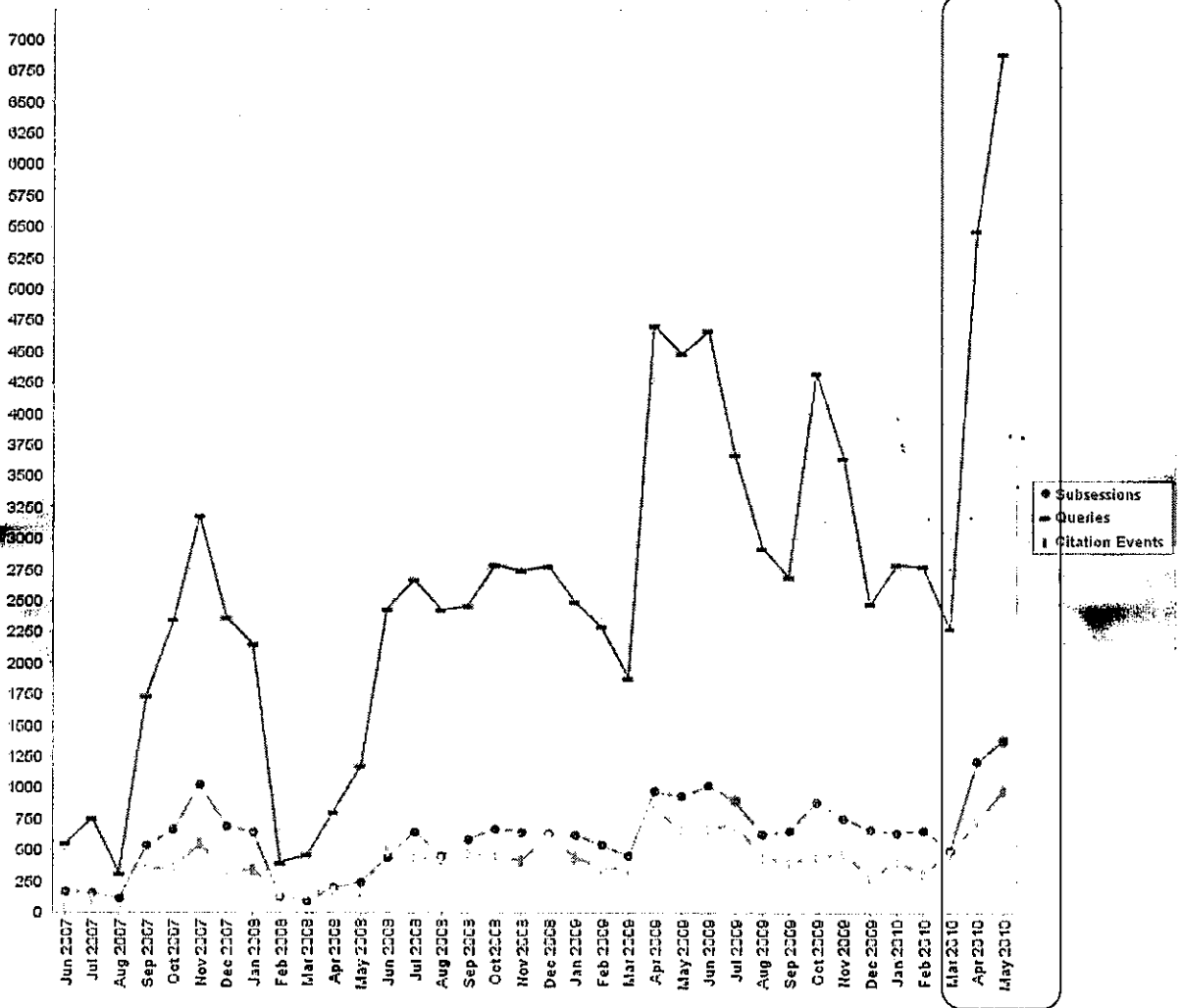
者名] の著者セット」の表示 (図 2) などの説明を見ることで、ようやく意味が分かったという図書館員の話も聞く。日本語の翻訳が適切にされていない箇所や、こなれていない日本語については、順次修正を行っている。

1.4 どの機能が人気か？

日本語インターフェースになってから、出張講習会後に毎回アンケートを取っているが、「役に立つと思われる機能」として挙げられた機能のベスト3は下記の通りである。①絞り込み機能 (Refine)：検索直後に出る画面で、自分のテーマで検索した結果に、どのような分野の文献が多かったか？どのような大学・研究機関が活発に研究しているか？この分野のオーソリティーの研究者の文献を探し出すことができる。

図3

Web of Science usage - Custom Summary Report



②引用マップ (Citation Map) : 引用関係を過去、未来に2世代に渡りグラフィカルにマップにすることができ多くの講習会参加者にとって印象に残る様子だ。特定の文献を引用している (Citing) 文献同士が、その後どのように引用されていたか? どの文献がどれくらい影響があったか? が一目で分かり、マップのノードは、大学名やジャーナル名などにも変更でき、色も分けることができる。③引用レポート (Citation Reports) : 引用レポートは、自分のテーマで検索した後に、論文数が、どれくらい増減したのか? またそのテーマの文献の影響度がどれくらい高

いのか? を一目で分かりやすくグラフにしてくれる。大学院生や研究者が新たな研究テーマを設定する際に便利だと言われている。

1.4 利用統計の伸び

使いやすくなったという利用者の感想だけでなく、実際にWeb of Scienceの利用が伸びてきているのも利用統計を見ればはっきりする。図3は、中堅の国立大学の利用統計であるが、日本語化された2010年2月以降、利用が急増しているのが分かる。大規模な大学や、昔から使っている大学では、英語のインターフェースでの利用者が既に多い為、日本語化の効果を利用統計

上、顕著には見られないケースもあるが、比較的導入が最近の大学や規模の小さい大学になればなるほど、日本語化の効果は大きい様子だ。

2. Web of Knowledgeバージョン5

インターフェースの中国語化、日本語化の次に予定されているのは、もっと利便性の高いインターフェースの開発である。その内容は、主に次の3点である。誰でも複数形や語尾変化を気にすることなく広く検索できる検索ロジックの採用、あるいはストップワードの改善、次にプロフェッショナルな検索者に対しても対応できるように10万件以上の検索結果の表示機能や近接演算子の導入、さらに著者検索を簡単にするResearcher ID番号での検索機能の搭載などである。まだ開発途中なので、全てのことをご説明できないこととお断りするが、具体的な内容は下記の通りである。

①入力した単語を全て検索（ストップワードの廃止）

現行では、AやTheなどの冠詞などのストップワードが設定されていて、その単語が検索語に含まれていた際は無視するように設定されているが（例えば“Vitamin A”は、Vitaminだけで検索）、Vitamin Aをフレーズとして検索ができるようになる。

②10万件を超える検索結果の表示：

現行のWeb of Knowledgeでは、10万件を超える検索結果の場合、最初から数えて10万件までしか表示できない、10万件を超える検索結果が表示でき、さらに被引用回数順の並び替えも可能となる。

③近接演算子NEAR/n：

現行では、SAMEという論理演算子で、同じフレーズ内に存在するキーワードが検索できていたが、新たなNEARの近接演算子で、キーワード同士が何文字以内に存在するかが指定できる。

④マークレコードの改善

現行では、500件までのレコードをマークレ

コードに一時的に蓄積できるが、この機能を拡張し、より多くのレコードをマークし、その集合で引用レポートなどの分析を可能にする。

⑤検索結果のサマリー画面表示の改善

検索直後のサマリー画面では、論文のタイトル、著者名、ジャーナル名を表示していたが、この画面で抄録がある文献については、+をクリックすることで、抄録も表示が可能である。リスト表示しながら、被引用回数や出版年を参照にしつつ、より詳しい内容を判断することが可能になる。

⑥Researcher IDとの統合

著者を特定できるResearcher ID番号での検索、レコード内のResearcher ID番号の表示が可能になる。

3. BIOSIS Citation Index

2011年のWeb of Knowledgeバージョン5を待つ正式にリリースされるBIOSIS Citation Index（現在トライアル受付中）は、引用データベースであるWeb of Scienceの姉妹製品としては、珍しい経歴がある。2003年にトムソン（当時）に統合されたBIOSISが作成していた生物学で世界最大のデータベースで、論文だけでなく、会議録や単行本も検索ができ、主要概念やコンセプトコード、種情報など索引語で検索ができる。Web of Knowledgeのプラットフォームでは、現在BIOSIS Previewとして利用することができ、Web of Scienceと一緒に利用すると、被引用回数の表示や、引用アラート、関連文献の表示ができる。2011年のWeb of Knowledgeバージョン5上でリリースされるBIOSIS Citation Indexでは、BIOSIS Previewのレコード全てに引用文献のデータが追加され、引用文献検索や引用マップ、引用レポートなど、Web of Scienceでできることは全てできるようなる。

昔は索引語を付与するのに時間がかかり、索引語を付けずに引用文献を、索引代わりに利用するWeb of Scienceは、Citation Indexingの考え方

で作成されたデータベースである。元来、索引語（統制語ともいう）を使わなかった引用文献データベースに初めて、主要概念、コンセプトコード、種情報などの索引語が使えるようになる。索引語は、さらにChemical AbstractsのCAS登録番号や、MEDLINEの疾病名MeSHターム、Enzyme Commission Number（酵素番号）、遺伝子情報ともインテグレートされている。ライフサイエンス版のWeb of Scienceとも言える、BIOSIS Citation Indexは、ある文献の被引用をたどる際に、それらを主要概念や、病名等で細かく絞り込むことを可能にする。

なお、BIOSISが収録する範囲は、植物学・動物学・分子生物学を始め、バイオメディカル・農学・薬学・生態学・バイオテクノロジー・生物化学・生物物理学など幅広い。

4. Researcher IDプロジェクトの現在

2008年4月にリリースされたResearcher ID.com (<http://www.researcherid.com/>) は、Web of Knowledgeと連携し、研究成果の情報発信を支援するプロジェクトで、誰でも申請すれば、無料で研究者一人一人にIDを発行し、文献リストを公開できるホームページも入手できる。Web of Science上では、引用レポートとして表示される部分を一般公開でき、データベースを契約していない人でも見るようになる。

さらに重要なことは、このIDで個々の研究者名を特定することができ、そしてその番号は複数の学術出版社やデータベース提供元と連携し、公の著者IDシステムになろうとしている。2009年12月のNature vol. 462 issue 7725の“Credit where

credits is due”を読んでいただくと、トムソン・ロイターのこの仕組みが、Nature Publishing Group, Elsevier, ProQuest, Springer, CrossRef, The British Libraryなど90以上の機関が参加し、ORCID (<http://www.orcid.org>) としてまとまりつつある。これは、現在、論文のIDとして使われているDigital Object Identifierと同じく、数字とアルファベットでの番号体系となる。

5. まとめ

以上のように日本語インターフェースは、トムソン・ロイターのグローバルゼーション、ローカライゼーション、ワークフローソリューションの流れの一環で、Web of Knowledgeがもはや文献検索だけでなく、ソリューションを提供している中の一環であることが分かっていただけたかと思う。弊社・日本事務所では、これらの新しいデータベースの使い方をさらに理解していただけるよう、24時間どこでも見ることができる講習会のビデオをインターネット上で日本語・中国語・韓国語・英語で公開している。また、双方向に質問もできるライブの講習会もインターネットで提供している。是非、ご視聴いただき、新しい動きを確認していただきたい。（インターネット講習会の利用例は、<http://science.thomsonreuters.jp/training/onsite/>を参照されたい。岡山大学での利用例を載せている。また、インターネット講習会のビデオやスケジュールは、<http://science.thomsonreuters.jp/training/webex/wos/>にアクセスするか、もしくは、「インターネット講習会」と検索すると表示される。）

◆原稿受付：2010. 8. 29